

## 海外活動

### 口唇裂・口蓋裂を中心とする 口腔外科手術に関する医療支援

顎顔面口腔外科 児玉泰光

2014年12月20日からの5日間、新潟大学歯学部（以下、本学）とUniversity of Dental Medicine, Yangon, Myanmar.（以下、ヤンゴン歯科大学）との姉妹校提携に基づく「口唇裂・口蓋裂を中心とする口腔外科手術に関する医療支援」に、顎顔面口腔外科の高木教授、歯科麻酔科の瀬尾教授、弦巻先生とともに参加させて頂きました。本稿をお借りして、その活動内容を報告させて頂きます。

#### ミャンマーの歯科医療と口蓋裂治療

ミャンマー（旧ビルマ）は、日本の1.8倍の国土に約5000万人を有する東南アジアの仏教国で、地図上ではインドの右隣に位置します。2010年の軍事政権崩壊以降、民主化が急速に進み、バブルを思わせるような街の賑わいがある一方で、格差の拡大（低所得者）が社会問題となっているそうです。歯科医師は、10万に約5人（日本72人、新潟県90人）と絶対的に不足しており、口腔外科医はさらに少ないとの事でした。ヤンゴン（最大の都市）とマンダレー（第2の都市）にそれぞれ歯学部があり（年間約150人が卒業）、口腔外科を標榜する病院は2つの歯学部病院を加えても4病院との事でした。口蓋裂治療に関しては、日本で行われているような一貫した治療体系はなく、言語治療や矯正治療も一般的ではないそうです。多くの症例で、医療費や通院費など様々な理由で術後

の経過観察が行われず、退院が治療終了となる場合がほとんどの事です。ミャンマーにおける口蓋裂治療は、これまでは国際医療支援によって支えられ、2000年を過ぎた頃からようやくミャンマー人歯科医師による口蓋裂手術が始まったそうです。ミャンマー人医師（形成外科）によっても手術は行われていますが、手術件数が症例数に追いついていないのが現実との事でした。ヤンゴン歯科大学では、年に数回、今回の我々のような国際医療支援（韓国チーム、日本チームなど）を受け入れる形で口蓋裂関連手術が行われており、その中で、技術の移転、スタッフ教育、医薬品や医療器具の寄付などが20年近く続けられています。

#### 出発から術前診察まで

この医療支援が正式に決まった後、高木教授と瀬尾教授がヤンゴン歯科大学を視察し、日本と同じレベルの手術を提供するためには何が必要か？どのような周術期管理を行うべきか？といった検討がなされました。そこで、医薬品（特に静脈内投与用抗菌薬、口蓋裂で用いる特殊な縫合糸、麻酔器材や麻酔薬など）が恒常的に不足していることから、口腔外科麻酔科同門会の先生方や関連企業に寄付金を募って購入するとともに、手術器材や器具、麻酔薬などは各方面に医療支援の主旨を説明して確保することになりました。また、これらの外国への持ち出しに関しては、航空会社や大

使館、関係する役所などと入念な打ち合わせを行いました。その甲斐もあり、必要とする物資は出発の5日前に段ボール10個にまとめることができ、12月19日にいよいよ出発となりました（写真①）。現地到着の翌日の12月21日には、朝から症例検討と術前診察を行いました。今回の口蓋裂疾患に対する医療支援（無償手術）の開催は、事前にヤンゴン歯科大学から新聞などで広報され、希望者から選抜された1歳2か月から37歳までの23名の術前診察を行いました（写真②、③）。日本での口唇形成手術は生後6か月が一般的ですが、手術予定の症例には7歳の両側性唇裂の男児も含まれており、この年齢まで手術に至っていないミャンマーの社会的環境、発展途上国における医療の状況を実感させられました。また、ビニールシートが巻かれたマットが置かれただけの病床（写真④）、必要最低限の器機しか備わっていない

手術室（写真⑤）、過去の国際医療支援で各国から提供された手術器具、とりわけピオクタン（切開線を印記する液体）の入れ物がウイスキーキャップで代用されていた事などは、とても印象的でした。



③術前診察



①出発前の成田空港



④病室



②症例検討



⑤手術室

## 手術

12月22日から24日までの3日間は、我々のチーム日本（新潟大学）とチームミャンマー（ヤンゴン歯科大学）とに分かれ、2つの手術室を使って8時30分から並列で手術が行われました。チーム日本は、各日3例、4例、3例、内訳は口唇形成術7例、口蓋形成術2例、顎裂部腸骨移植術1例、計10例の手術を担当し、全身状態が悪く延期となった1例を除いた残りの12例をチームミャンマーが担当しました。全身麻酔の導入と挿管は、瀬尾教授と弦巻先生の阿吽の呼吸で難なく終了し（写真⑥）、いよいよ記念すべきチーム日本の初手術が開始されました。ヤンゴン歯科大学のスタッフは、高木教授のメスの運び、縫合針を置く位置、縫合糸の強さ、その全ての動きを目に焼き付けるように凝視し、常に高木教授の背後には沢山の見学する先生の姿がありました（写真⑦）。また、器械出し（scrub nurse）との連携に始めは苦



⑥麻酔導入



⑦手術（第1例目）



⑧全手術終了  
（ヤンゴン歯科大学口腔外科  
Prof.Win Naing、Scrub nurseと）

勞しましたが、徐々に器具のやり取りもスムーズとなり、最終日には三角弁の頂点が合わさる度に「beautiful!!」と言ってもらう程に打ち解け、終始順調に手術を進める事が出来ました。手術中に停電や酸素配管の圧力低下などのトラブルも起きましたが、予定されていた手術が全て安全に終わった時には、何とも言えない充実した気持ちとなったのを、今でも記憶しています（写真⑧）。

## 医療支援を終えて

昨今、一部で無計画な国際医療支援が増え、先進国の心無い医療者による「サファリサージェリー」と、現地民に揶揄される事例もあるそうです。しかし、今回、最終日の夕食時、ヤンゴン歯科大学のスタッフから「来年はいつにしようか？」と話があった瞬間、今回の医療支援の成功を確信することができました。さらに、口蓋裂関連手術の周術期管理、手術法や手術時期の違いによる形態観察など、医療支援を永続的に行うことで実現可能な共同研究についても意見交換ができた事は大きな収穫でした。次に考えなければならないことは、この経験をどのように本学に活かすか？です。ここ数年、本学では日本学生支援機構（JASSO）の留学生交流支援制度（SSSV）を利用した海外の歯科大学への短期留学が可能となっていますが、希望者殺到ではないと伺っています。本学で質の高い教育を受け、その実力を遺憾なく発揮できるチャンスであることを、学生達はまだ気づいていないようです。本学のミッショ



ンでもあるグローバル化社会で活躍できる歯科医師の養成に繋がるよう、こうした国際医療支援が本学でも行われている事、また、卒後もこうした活動を通して国際感覚を養えるチャンスがあることを積極的に発信してゆくことが、ある意味で最も大切なミッションと感じます。一方で、我々も単に無償手術を提供し、感謝して頂くことに甘んずることなく、共同研究を立案し、寄付を頼らず外部資金を調達するなど、質の高い医療支援をさらに目指すことが必要と思います。

最後に、「口唇裂・口蓋裂を中心とする口腔外科手術に関する医療支援」が、ミャンマーの口唇裂・口蓋裂治療の改善・発展に貢献することは言うまでもありませんが、そこで生まれる信頼関係から両学部の交流がさらに発展し、将来、世界で活躍する歯科医師が新潟大学歯学部から増える事を期待して止みません。

#### 謝辞

今回の医療支援に際し、多くの方々から物資や金銭的な援助を頂きました。改めて、心から感謝申し上げます。また、年末の忙しい時期の海外出張となり、口腔外科・歯科麻酔科の先生方、外来病棟の医療スタッフには様々なサポートをして頂きました。加えて、吉田事務室長をはじめとする歯学部事務の皆様には、煩雑な手続きなど全て対

応して頂きました。ご協力頂きました全ての関係者の方々に、この場を借りてお礼申し上げます。



⑨術後、病棟で



⑩術後、病棟で

# SCRP報告

## 2014年度SCRPを終えて

歯学科3年 鹿間優子

8月20日に歯科医師会館にてStudent Clinician Research Programが、開催されましたので、ご報告いたします。

SCRPとは、各大学により選抜された歯学部所属の学生が日々の研究成果を発表する場で、持ちブースで審査員への説明および質疑応答をすべて英語で行うという研究発表会です。本年度は基礎部門において「Purification of Large Molecular Weight Protein Complex Containing Klf4」というテーマで発表させて頂きました。メンバーは歯学科5年佐藤、目黒、口腔生命福祉学科4年西川そして私、鹿間を含め4人で、歯科薬理学分野佐伯教授ご指導の下約半年間研究に励みました。

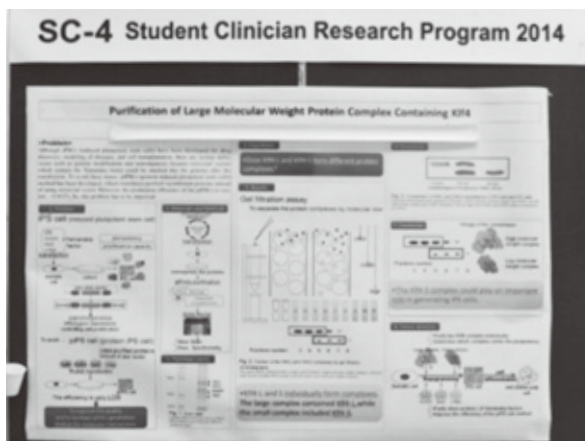
具体的な研究内容についてですが、本研究では近年難治疾患治療への応用が期待されているiPS細胞についての解析を行いました。初期化に必要な遺伝子産物すなわちタンパク質を細胞の外から導入する手法を利用したprotein iPS細胞にまず

注目し、そして、4つある初期化遺伝子の中でも特にKlf4に着目しながら初期化関連タンパク質について研究しました。さまざまな実験の結果、Klf4は大と小の2種類の複合体を作り、分子量の小さいKlf4複合体が初期化に重要な働きを持つことを見出しました。

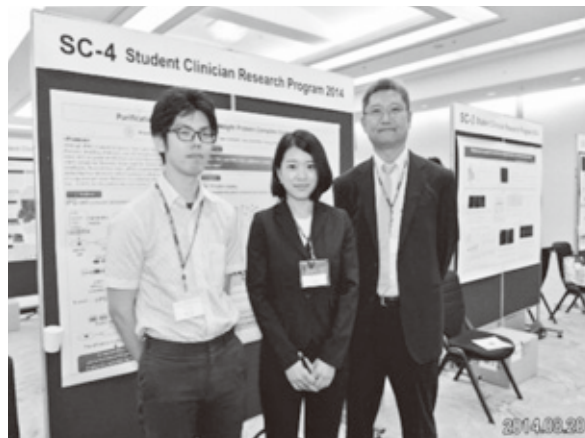
今回の研究活動では期待を上回る結果を得ることができ、非常に楽しく取り組みました。困難が立ちだかる時もありましたが、研究の方向性や結果を議論し合った時間は本当に有意義でした。そして何より、私達の研究が一つの発見に繋がった事を大変嬉しく思っています。

私達歯学部生には、歯科医学における基礎教育と臨床教育両方を受ける機会があります。授業を受け基礎研究に興味を持ったとしても腰を据えて取り組める機会はあまりなく、さらに発表する機会についてはなおさらです。このSCRPは、研究活動を行い、内容をまとめ発表しさらに評価を頂ける又とない経験を得ることができる大会です。少しでも興味のある後輩達には是非勇気を持って挑んで欲しいと思っています。

最後になりましたが、SCRP参加に関しご指導頂きました先生皆様方に深く感謝致します。



実際に発表したポスター



応援に駆けつけてくださった先生方と記念撮影

# 短期留学を体験して

## 短期留学を経験して

口腔生命福祉学科1年 濱野美咲

私は、今回人生ではじめて日本学生支援機構（JASSO）による留学生交流支援制度プログラムの一環として、短期留学のプログラムに参加しました。まず、私がこのプログラムに参加した理由は3つあります。1つ目は、一度は留学経験を大学生のうちにしておきたかったからです。2つ目は、歯学の知識や英語力は未熟ですが、早いうちに海外に出て、海外の医療の現場や日本との違いを自分の目で見ることにより、これからの学校生活や人生に活かせるものを見つけ、かつ身に着けたいと思ったからです。3つ目は、控えめで面倒くさがりの自分を変えたかったからです。このような思いを抱いて、私はタイにあるチェンマイ大学へ、2週間派遣されました。この2週間という短期間に、私はここでは書ききれないほどの多くのことに触れ、また学ぶことができました。大学内のデンタルクリニックの様々な科を見学させていただき、タイではレジンだけでなくアマルガムでの充填を行っていること、日本と比べてクリ

ニックの人々は軽装であることなどを知ることができました。また、タイの学生たちとの交流や観光、プランテーションプロジェクトへの参加をしたことにより、タイと日本の大学生の勉強意識の違いや、タイの文化に触れることができました。この留学を通して、私が最も驚いたことがあります。それは、タイの人々の自分の歯や歯科に対する意識です。私は、日本のように毎日歯磨きをしたり、定期健診などが行われていると思っていましたが、そうではなかったのです。タイの人々の中には、様々な理由がありますが、主に経済的理由で、歯磨きを毎日当たり前にできなく、歯科医院に通うお金もない人がいるということを知りました。そして、日本は恵まれている国だと改めて感じました。

この短期留学に参加したことにより、自分を少しですが変えることができたと思いますし、一方で英語力や自主性、歯科知識の不足にも改めて気づくことができました。この経験は、これからの人生にきっと活かしていきたいと思います。とてもためになる貴重な経験をさせていただき、ありがとうございました。



タイの動物園にて。右側が筆者。



タイの有名な観光地にて。右側が筆者。



## タイ・チェンマイ大学訪問記

歯学科4年 横 関 麻 里

私は日本学生支援機構（JASSO）による留学生交流支援制度プログラムの一環として、昨年の8月にタイのチェンマイ大学を訪問させていただきました。

学生のうちから海外の歯学部を訪問させてもらうことができるなんてこんな良い機会はない！時間がある今のうちだ！と思ったのと、以前にタイへ留学に行った同期の勧めで、チェンマイ大学の短期留学に参加させていただくことを決めました。

プログラムでは、大学病院の様々な診療科の見学のほか、障害者施設での保健指導、大学職員の方と一緒に奉仕活動の一環としてプランテーションを体験しました。

病院見学の中でも印象的に感じたのは、学生の臨床経験がとても豊富であるということです。タイでは4年生から臨床実習が始まります。そのため、私と同じ4年生がもうすでに患者さんを治療していました。口腔外科に行った時には、6年生の学生が患者さんの抜歯を3本連続全て一人で行っていました。このように学生が積極的に治療に取り組んでいる姿に驚いたと同時に、刺激も受

けました。また、学生が書いた患者さんのカルテを見せてもらおうと、治療方針が全て英語で書かれていました。私も4年生では何回か英語論文を読む機会がありましたが、歯科専門用語の英語の訳にとっても苦労しました。それを思うと、歯科の専門分野の英語に日頃から触れるというのはとても良い取り組みだと感じました。

短期留学では、学業の他にタイの文化にも触れることができました。ゾウに乗ったり、バイクの2人乗りをしたり（ローマの休日を観て以来ずっと憧れていた）竹でできたボートで川下りをしたりと、日本にいる時よりもアクティブに活動していました。川下りをする時、濡れてもよい恰好で来てねと言われ、何となくサッカー日本代表のTシャツを着て行ったのですが、異国の地で自国のユニフォームを着て出歩くことがこんなにも恥ずかしいのかと痛感しました。

この2週間、日本を飛び出したからこそできた素敵な出会い、経験がありました。その間支えて下さった多くの方々には本当に感謝しています。自分と同じ、歯科医師を目指す海外の学生がどのようなことを学び、どのように取り組んでいるかを見ること、知ることができ、とても刺激を受けた2週間でした。タイで感じたことを忘れず、これからも勉強に励みたいと思います。



チェンマイ大学のロビーにて。右が筆者。



チェンマイの学生と。前列中央が筆者。

## 短期留学を経験して

歯学科4年 小山 祐 平

私は日本学生支援機構（JASSO）による留学生交流支援制度（SSSV）の一環として、8月4日から16日までの12日間、台湾・国立陽明大学に短期留学させていただきました。この度、歯学部ニュースへの短期留学について報告の機会をいただけましたので、この場をお借りしまして、ご報告させていただきます。

まずは、簡単に台湾について。意外と日本人の中には、台湾を中国本土と一緒にしてしまっている人がいるようですが、台湾の正式名称は中華民国。同じ中国でも全く異なります。と私たちのお世話をしてくれた、私と同学年の陽明大学の学生が力説してくれました。彼は、3月に起きた学生による立法院（日本で言う国会議事堂）占拠事件（台湾では、ひまわり運動と呼ぶ）に参加したほど、アクティブな学生でした。

さて、台湾・国立陽明大学での短期留学プログラムは、台北市にある榮民總醫院（Veteran General Hospital）において、実際の治療を見学するというものでした。

この榮民總醫院は、もともと退役軍人（榮民）のために設立された病院で、1日の外来患者は1万人、病床数は3千床、医師数は1千人、スタッフは5千人と、日本の病院では考えられないほど、台湾の大規模な病院の一つです。



陽明大学の学生と。筆者は右から3番目。

この病院の歯科には、歯周病科、矯正歯科、歯髓病科、小児歯科、総合診療科、口腔外科、補綴科の7診療科あり、この7診療科を8日間かけて見学させていただきました。私は4年生になり、臨床系科目の座学や実習で学んだことが、実際の臨床現場で見学を通して学ぶことができたことは、大きな収穫であったと思います。

また、歯内療法学や補綴学、歯科矯正学など、後期から実習が始まった科目についても、実習している今となって、当時どのような目的でどのような治療をどのように行っていたのかよく理解できます。

さて、病院見学後の時間や休日は、陽明大学の同学年の主に7人の学生を中心に、日替わりで、私たちを台北市のみならずその周辺の街に案内してもらいました。まさに、至れり尽くせりです。台北市内であれば、士林夜市をはじめとするナイトマーケット、台北101、中正記念堂、故宮博物院、總統府、九份、平溪線など様々な場所に連れて行ってもらいました。やはり、印象に残っているのは、九份でしょうか。ここは、誰もが知っているあのジブリ映画のモデルとされた、台湾でも有名な観光地であり、多くの人で賑わっていました。

今回の短期留学を通して、ここでは書ききれないほどの貴重な経験ができ、非常に大きな収穫でした。また、自分の英語力の無さを改めて痛感するいい機会にもなりました。

最後になりましたが、このような充実した短期留学ができたことに、両校の歯学部の先生方、学務の方々改めて感謝申し上げます。



ジブリの映画のモデルにもなった台湾の観光地「九份」。



## 短期留学を経験して

歯学科6年 吉原 翠

昨年8月、日本学生支援機構（JASSO）による留学生交流支援制度（短期派遣）プログラムによりタイのコンケン大学を訪問させていただきました。

コンケン大学はタイの東北部に位置する都市であり、コンケン大学は17の学部を持つタイ東北部最大の国立大学です。

コンケン大学では2週間滞在し、歯学部附属病院の見学を中心とした実習をさせていただきました。

新潟大学では、5・6年生が臨床実習として総合診療部で診療しています。先生方をはじめ、病院のスタッフの方や患者さんの多大な協力の下で実習が行われています。

一方、コンケン大学では4年生から臨床実習が始まります。学生が行う治療の範囲も日本に比べて幅広く、見学した診療科の多くで学生が診療に参加していました。

このような違いの生じる背景には、タイでは患者さんの支払う治療費が学生と歯科医師の診療で異なるということがあります。学生の診療はより安い価格で受けられるのでそれを選択する患者さんも多く、学生の経験する症例数も多くなります。

日本でタイと同じ制度を取り入れることは難しいと思いますし、それが望まれているのかもわか

りません。ですが、タイに行くまでそのようなシステムを知らなかったのが、とても興味深く思いました。

コンケン大学では多くの方に大変お世話になりました。2週間のうち、日中は病院を見学していましたが夕方以降は学生や先生方が夕食などの面倒を見てくれました。休日には動物園や寺院に行き、タイの文化に触れる機会を多く与えてもらいました。先生や学生とは英語で会話することがほとんどでしたが、自分の拙い英語を理解しようと努めてくれたことに非常に感謝しています。また、英語だけでなく、海外からの学生に積極的に関わっていく姿勢も見習いたいと思いました。

最後になりますが、この場をお借りして海外短期派遣のために尽力してくださった先生方に感謝の意を申し上げます。ありがとうございました。



コンケン大学の学生が、休日に湖に連れて行ってくれました（左側が筆者）。

---

---

# 歯学体報告

---

---

## 歯学体報告 ゴルフ部

歯学科3年 神野 愛

歯学部ニュースをご覧の皆様、はじめまして。歯学部ゴルフ部部長の神野愛と申します。今回、この「歯学部ニュース」におきまして、歯学体での結果報告をさせていただく機会を頂けたことを、大変嬉しく思います。

平成26年度の歯学体は、8月4日から6日に北海道恵庭市にある「恵庭カントリー倶楽部」で行われました。最近の若い世代は、残念なことに、昔に比べゴルフをしなくなったため、ゴルフ人口は減少しているそうですが、歯学体では総勢274名のもの学生が真剣にプレーに取り組んでいました。新潟大学からは、4年生から男子2名・女子1名が参加しました。大会当日は、天候に恵まれず、雨風のなか、選手たちにとってはとても苦しい試合になりました。しかし悪天候の中でも選手

たちのプレーは、ルールやマナーを守りながら、まるでプロのような本格的な試合でした。実際に何人かの選手は、幼い頃より練習を積み、中にはゴルフ留学をしていた選手もいたそうです。そのような強豪ぞろいの試合において、4年の竹澤みなみ選手が1日目76(39・37)、2日目76(39・37)という素晴らしいスコアを叩き出し、優勝しました。竹澤選手は、現在4連覇と華々しい活躍をしております。平成27年度の歯学体は愛知県での開催となりますが、今後も連覇を狙う竹澤選手をはじめ、部員一丸となって試合に臨みたいと思います。

現在、歯学部ゴルフ部は男子8人、女子7人の計15人で、毎週月・水曜日に県庁の近くにある「日経ゴルフガーデン」で活動しています。練習内容は、一人百球の打ちっぱなしをメインに、他にもパター、アプローチの練習を行っています。部員の多くは、ゴルフの未経験者ですが、先輩方をはじめ、コーチの石田先生が一人一人丁寧に指



日経ゴルフガーデンにて。上段左から2番目が筆者。



平成26年度の歯学体にて  
現在4連覇中の4年竹澤選手

導してくださるので着実にプレー技術の向上を図ることができます。また、新発田市にある「フォレストカントリー倶楽部」さんのご好意で、不定期ではありますが、実際のコースで練習をさせていただくこともあります。そして毎年、ゴルフ部OBの先生方や歯学部内の先生方を招いて学内戦や、歯学体に出場しております。また、ゴルフ部では随時新入部員を募集していますので、興味のある方は気軽にゴルフ部員にお声かけください。

最後に、毎年多くのご支援を頂いております、OB会の方々をはじめ、顧問の高木先生、元顧問の大橋先生、コーチの石田先生、いつもお世話になっている重谷先生、山中先生にこの場をお借りして改めて感謝を申し上げます。これからもゴルフ部をよろしく願います。

## バレー部歯学体報告

歯学科4年 森 昂大

歯学部バレーボール部は、今年度8月5日から8日までの4日間、私たち新潟大学の主管のもと、地元新潟の西総合スポーツセンターと黒崎体育館を会場に、歯科学学生総合体育大会（デンタル）を開催させていただきました。大会開催に際しましてご尽力いただきました、顧問の瀬尾憲司教

授、バレーボール部OB・OGの皆様には、この場をお借りしまして御礼申し上げます。

僕が歯学部バレー部に入り4年が経ち、毎年デンタルには参加してきましたが、今年度の大会はその中のどれよりも「異質」であって、でもそのどれよりも「充実」したものだだと思います。

「異質」の理由は、やはり新潟大学が主管校となったことで、大会運営という大きな仕事を任されたことです。昨年度のデンタル会場で、次期主管校を決定するくじを引き当ててしまってから、会場となる体育館の予約、審判員へのご依頼、各大学との連絡など、仕事は立て込み時間はすぐに過ぎていきました。正直、それらの仕事をしているときは、大変で嫌になることも多かったですが、今振り返ると、どれもが良い経験になったように思えます。僕がこれらの仕事を通して一番感じたことは、普段は一大学生である自分も世間一般から見れば一社会人であり、だからこそ一社会人として責任ある立場にあるということです。約一年の大会準備の間、新潟市職員の方々やデンタルを共催していただいた観光会社の方々など、数多く関わらせていただく機会がありました。そのような方々と、一緒に大会準備を進めさせていただくなかでは、大変なご迷惑をおかけしてしまったこともありました。その時には、社会で長い間働いておられるそのような方々と比べ、自分の社会人としての思慮の浅さを痛感させられました。つい学生だと思っていると、ミスをして許されると甘えてしまいがちです。しかし、自分と同じ年の人の中には、就職して働いている人もいます。そう思うと、当たり前のようなのですが、世間の中では自分もまた一社会人とみなされて当然であり、社会人として、相手のことを考え、自分の行動に全て責任を持たなければいけないと改めて感じました。

そんなこんなな準備期間の一年でしたが、それらをこなしていく日々は「充実」していました。今回の大会は、大会準備に加えて、自分たちのチームが勝つための練習をしたり、また学生として歯学部の授業面では保存や歯冠修復といった専門科目の実習がはじまったり、テストがあったりと本当に忙しいときもありました。でも、忙しい



中でも、部活の練習後にはご飯に行ったり、練習試合や大会後には飲みに行ったり、夏には海で浜コンをしたりと、オンとオフを切り替え、その忙しさの中で過ごす日々は充実していました。

ここ数年バレー部には、プレーヤー、マネージャーを含め多くの新入部員が入り、活気にあふれるようになりました。さらに練習には、お忙しい中、OBの先生方も参加してくださり、より幅広い練習ができるようになりました。そんな環境で、チームとしても力も少しずつ向上していくのが感じられました。そして、満を持して迎えたのが今回の地元新潟開催のデンタルでした。多くの

OBの先生方や友人など、たくさんの方々が応援にきてくださった中で、臨んだ今大会でしたが、結果は男子部、女子部ともに予選リーグ敗退という残念なものとなってしまいました。この結果を通して、自分たちの弱さ、それは単純に身体の弱さもだし、心の弱さもだし、チーム（組織力）として弱さを認識させられました。大会前、自分たちはチームとしての良いところばかりをみて安心し、チームの脆い部分には目を瞑ってきてしまったのだと思います。来年度の大会に向けて、自分たちの長所・短所を見つめなおして、チームとして成長していきたいと思います。



新潟市西総合スポーツセンターにて。中段右から2番目が筆者。